

Acad. Sci. 6: 160 (1899) — *O. sinuata* var. *grandiflora* S. Watson (1873) — *O. sinuata* var. *grandis* Britton (1894) — *O. laciniata* var. *grandis* (Britton) Rose ex Britton & A. Brown (1913) — *O. laciniata* var. *grandiflora* (S. Watson) Robinson (1908) と認め、これに対して新たにオオキレハマツヨイグサの名を提唱することにしたい。なお本種のタイプ標本の産地は、アメリカ合衆国テキサスの Austin 近くの砂丘地帯の由で、現在の我が国での生育地と同様で興味深い。

ちなみに筆者は、これに対して従来、仮にハゴロモマツヨイグサなる名を一部の方に披露しておいた。確かに本種の下部のもの（特に根生葉）は、羽裂あるいは波状に切れ込むものの、上部のものはほとんど全辺となるので、この名はあまり適切なものと考えられない故、これの使用を保留することとしたい。

なお、この問題に関しては、現在、筆者の手元に蒐っている諸資料をもとに、近似種との比較を含め、さらに検討を実施中であり、その詳細は別報に譲りたいと思う。

7. マルバコマツヨイグサ (新称)

周知のようにコマツヨイグサは本属の *Raimannia* 節の中でも、最も広く世界各地に帰化している種類である。したがって当然のことながら、従来、若干の変異品が認められているが、そのなかで葉がほとんど羽裂せず、多少卵形を呈し全辺のものがある。各地から筆者のもとに寄せら

れている標本中にも、これに該当するものが見出される。これは *Oenothera laciniata* Hill form. *integrifolia* Jansen & Kloos (1922) にあたる。これに上掲の名を与えておく。

8. オオメマツヨイグサ

以前から本州の中部の高原地帯などに、草姿はメマツヨイグサ (*Oenothera biennis* L., s.l.) に似ているが、より花の大きなものの存在が気になっていた。これを各地のものについて検討してみたところ、オオマツヨイグサ (*O. glazioviana* Micheli — *O. erythrosepala* Borbás) とメマツヨイグサとの間に生じた雑種と考えるのが妥当との結論に達し、これをオオメマツヨイグサと呼んでおいた。

このようなものの存在は、欧米諸国においても夙に知られており、葉や花部の形態などは、ほぼ両者の中間的性質を備えているが、個体によって若干の差異がみられる。しかしオオマツヨイグサに比較して葉が波うたず、花弁は若干小さく、葉の鋸歯が浅いこと、萼片が暗赤色を帯びることが多いのは良い特徴である。現在、ヨーロッパの一部では、このようなものを *Intermediate Evening-primrose* として扱い、これに *O. fallax* Renner をあてている。はたして我が国で見られるものが、これに該当するか否かはその母種自体の問題も関係し、一概に決めることは難しい。今後、細胞遺伝学的見地からも詳細な検討が必要と考えられる。

(東京歯科大学)

(本誌 61 (1): 30-32, 1986より続く)

アブラナ科の帰化植物オニハマダイコン追記 (浅井康宏)

Yasuhiro ASAI: Additional Notes on the Distribution of *Cakile edentula* (Bigel.) Hook. in Japan

北アメリカ東部沿岸地方の原産で、特異な多肉質の海滨植物であるオニハマダイコン (*Cakile edentula* (Bigel.) Hooker, Fl. Bor.-Amer. 1: 59, 1830 — *Bunias edentula* Bigelow, Fl. Bost. 157, 1814) の帰化が、我が国で知られてから既に10余年を経過した (浅井, 本誌 57: 187-191, 1982)。その後、本種は最初の発見地である新潟県村上市を中心に同県下一帯に拡がり、さらに隣接の山形

県 (酒井 1991) や秋田県 (藤原 1993) にも生育が知られるに至っている。一方、筆者は北アメリカ西海岸での本種の分布経過を例にあげ、我が国へ侵入後の分布状態の推移を、年代を追って正確に記録することを希望しておいた (浅井, 自然誌研究雑誌 1: 9-18, 1991)。

ところで最近、北海道日高地方のフロラに造詣の深い高橋 誼氏が本種を採集 (1995. 7. 30) さ



Fig. 1. Community of *Cakile edentula* (Bigel.) Hook. with immature fruits in sunny sandy beach of Tomihama, Monbetsu-machi, Hidaka, Hokkaido (Photo by the courtesy of Mr. Y. Takahashi, July 30, 1995).



Fig. 2. Fruits of *Cakile edentula* (Bigel.) Hook. from the same place as Fig. 1.

れ、筆者に同定を求められた。今回の発見地は、同氏が居住されている太平洋に面した日高の沙流郡門別町富浜の沙流川河口付近であるが、さらに隣接した鶴川町の鶴川河口付近でも見つっている由。いずれも向陽の海浜砂地で、オカヒジキやシバムギのほか、ハマアカザ、ウラジオアカザ、ハマベンケイソウ、さらにヒロハウシノケグサ、カモガヤ、コヌカグサなどのイネ科の帰化植物に伍して生育し、可成りの個体が散生するとのことである。

周知のように本種はハマダイコンと同様に海岸の砂地に生育し、大型の蒴果が風あるいは海水(流)などによって運ばれ分布域を広げることから、本州の日本海沿岸各地へ拡がるのは時間の問題と考えていた。北アメリカ西海岸での事例によると、オニハマダイコンは年平均50-60 km、すなわち約2,000マイルの距離があるカリフォルニア湾(サンフランシスコ)からアラスカ(コジアク諸島)まで分布域を拡大するのに、約50年間を要したとされている(Barbour and Rodman 1970)。

したがって本種が10余年を経て本州の日本海沿岸から、海を隔てた北海道の太平洋岸へ拡がったとしても異とするに当たらない。恐らくその中間

地域である青森県や北海道の太平洋岸各地にも、既に生育しているものと思われる。

このようなことから、現在、オニハマダイコンは予備帰化植物の域を脱し、完全な定着帰化の段階にあるものと判定される。なお本種は原産地での生育状態を勘案すると、幅広い気候上での適応性を有すると考えられるので、古い逸出起源の帰化植物であるハマダイコンと同様に近い将来、北海道～琉球に至る全国各地に分布範囲を拡げ、我が国の普遍的な海岸植物の一員として君臨するものと思われる。今後、未だ記録のない本州の太平洋岸各地への分布について、同学諸氏の注意を望みたい。終わりに、貴重な資料を提供された高橋誼氏に対し感謝の意を表する。

Cakile edentula (Bigel.) Hook., a native of the east of North America, was recorded to be found for the first time in 1982 as a new alien at the coast of Niigata Prefecture of the Japan Sea side in Honshu. Recently, this fleshy plant was newly found in the sandy beach of the Pacific Ocean side of Hokkaido, Northern Japan, on July 30, 1995.

(東京歯科大学)

ヒロバスゲ類の区別と分布 (山中二男)

Tsugiwo YAMANAKA: Miscellaneous Notes on *Carex insanae*

ヒロバスゲ、アオバスゲおよびアオヒエスゲは、種としては *Carex insanae* Koidz. にまとめられ、それぞれ var. *insanae*, var. *papillatculmis* (Ohwi) Ohwi, var. *subdita* (Ohwi) Ohwi とする(大井 1953, 1982) のが普通で、吉川(1957, 1960) のよい図がある。この類は、まず葉の幅の相違で区別するが、ほかに花序や走出枝をとりあげることもある(小山 1964)。ここでは、主として四国でアオバスゲとアオヒエスゲを見直して気付いたことを、いくつかまとめておく。なお、証拠標本は東北大学理学部生物学教室植物標本室(TUS) におく。

形質 これまで、葉はヒロバスゲが最も広くて、幅が 8-10 mm ときに 15-20 mm になり、ア

オバスゲは 4-8 mm、アオヒエスゲは狭くて 2-4 mm とされている。四国山地の 20 か所あまりで調べた約 50 株では、幅 4-9 mm そのうち半数以上は 5-7 mm で変異は少なく、はっきりしたアオバスゲの形である。この大きさのものは、丘陵や海岸近くにもまれにあるが、低地にはほとんど幅 3-4 mm、花後に伸びた葉でときに 5 mm になるアオヒエスゲが見られる。

ヒロバスゲでは、普通の花序だけでなく、茎が高くならず株もと近くをなかはうような花がつき、これをほかと区別する特徴の一つとみなしがちである。ところが、四国山地でアオバスゲとしたものでも、こうした地表近くの花序がある場合が、調べたうちの 50% をこし、また多少は伸びる